懸念を拭えないトランプ政権の一か月

トランプ米大統領が就任して一か月がたった。政権幹部の辞任劇があったり、司法と衝突したりするなどごたごた続きだ。やや現実的になった分野もあるが、世界が抱く懸念を払拭するには程遠い。職責の重さを自覚し、相応しい振る舞いをしてもらいたい。

米国は政権交代ごとに政府高官が多数入れ替わるため、出だしでもたつくことは珍しくない。それでもトランプ政権の出だしはあまりに多難である。ギャラップの世論調査によると、目下の支持率は４１％、歴代政権の同時期の平均値より２１ポイントも低い。

トランプ氏は、既成権力への人々の嫌悪感を糾合する形で当選した。自分が最高権力者になったにもかかわらず、大衆扇動的な手法は変わらない。

イスラム圏の七カ国からの入国制限は連邦高裁で否定された。移民制限を進めるにしても、民族・宗教の対立を煽るようなやり方は好ましくない。

来日したマティス国防長官が日米同盟の価値を再確認したことは評価できる。とはいえ、司令塔は誰で、政権全体としてどこへ向かおうとしているのかは、相変わらずよくわからない。

就任前にロシアと接触していた問題の責任を取り、フリン国家安全保障担当大統領補佐官が辞任した。政権発足３週間余りでの幹部更迭は前代未聞である。

「昨夜、スウェーデンで起きたことを見たはずだ」。トランプ氏は先週末の支持者向け集会で、ありもしなかったテロ事件に言及した。メディア報道をよく「偽ニュース」と罵るが、これでは天に唾するようなものだ。

より危惧すべきは、不確かな話を鵜呑みにする人であると分かったことだ。目にしたのが、米国のどこかが核攻撃を受けたという偽ニュースでなかったのは、不幸中の幸いである。

北朝鮮の弾道ミサイル発射に際し、衆人環視のもとで機密情報の報告を受け、側近と対応を協議したのも大統領らしからぬ振る舞いだった。公職に就くのは初めてなので、政権運営の基礎知識が乏しいのだろう。

歴代の米大統領の回顧録を読むと、酒も遊びも控えなくてはならない籠の鳥の日々への恨み節がよく出てくる。超大国の指導者というのは決して楽しい仕事ではないはずだ。トランプ氏にはまずそれをわかってほしい。